

# Drill vol.4 ∞

12/2006 @トキ・アートスペース

## ズレと根源性と継承

文/アライ=ヒロユキ

山岡佐紀子の作品は、ほぼ最初のパフォーマンスから見続けているが、縦貫するひとつのテーマがある。それはある種の根源的な要素や素材を取り上げ、身体を使った反覆あるいは展開で作品を成り立たせていることである。現代音楽でいうなら minimal music、造形芸術なら primal structure という概念が、これに近い。ただし観念だけのおおむね完結しうる造形芸術と違い、身体行為は観念とのズレがどうしても生まれる。そのズレや振幅が作品の見どころともなる。

『Drill vol.4 ∞』は、その名の通り「ドゥリルシリーズ」の4番目となる。ドゥリルとは、私たちが子どものころ学校で学んだ（学ばされた）反覆練習の学習教材のことである。作家の言を借りれば、「言語とそのリズム感が、その思想を作るのだと思う。日本語のリズムの思考のまんま、西欧文化を翻訳で学んだ私たち。不思議で妙な閉息感のある文化を持つ現代の日本人の感覚を、私自身の身体を通してお見せする」。これをドゥリルという形で作品化することに、当初から継続するテーマを見て取れる。

同シリーズ前作では、彼女が「西欧文化の翻訳」というように、身体行為に併せ、特攻隊やロックのクイーンなど、さまざまな映像がまさに混血（クレオール）文化的に提示された。しかし今回は、打って変わって日本の伝統的な言語芸術である和歌を取り上げている。素材として使われたのは「伊呂波歌」で、和歌であると同時に日本語の47文字を学ぶための学習素材。なお狂言や能の観世流の発声法も参考にしたという。

まず彼女は今作に至るまでのプロフィールをかいつまんで説明した後、会場の壁にテープ（この素材はこれまでもしばしば登場した）をはりめぐらしていく過程で、「伊呂波歌」を歌いながら、その歌詞を赤字で書き込んでいった。このプロセスは観客にバトンタッチされ継続。最後に彼女が再び引き受け、「いろは」のループの終点と始点をつなぎあわせてxを自らの体に刻印。さらに前回行ったようにロックミュージシャン（矢沢栄吉を参考にしたという）の身振りを交えながら「伊呂波歌」を歌って終わる。

「いろは」が赤字（血の象徴）で書かれていることから分かるように、彼女が意図したのは人の歴史の流れであろう。それが「いろは」であるのは、日本という共同体に焦点を合わせたため。能の発声法を参考にしたという彼女だが、専門的な訓

練を受けてはいないのでパフォーマティブであったわけではない。むしろひとつの「メソッド」を各人さまざまな形で体内へ刻印し反芻していく共同体の歴史の有り様を示して見せた、と考える方が正しいだろう。参加型であるのは、その反芻を普遍性をもって提示するためだ。論理的に解説してみたが、観客が参加したことによるさまざまな「いろは」の呼吸とリズムの多様性（あるいはズレ）のライブ感が、今作の狙いだろう。

ちなみに「伊呂波歌」は、「色は匂へど散りぬるを我が世誰ぞ常ならむ有為（うゐ）の奥山今日越えて浅き夢見じ酔ひもせず」が歌詞で、涅槃経第十四聖行品の偈（真理を詩の形式で示したもの）「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」の意を和訳したものという（「広辞苑」より）。とすると、彼女は生命の連関をループ上の「輪廻」として捉えており、ヨーロッパ近代の進歩思想とは距離を置いているのかもしれない。ちなみに、「いろは」は日本の伝統思想の言霊の概念とも関係が深い。現代音楽のツトム・ヤマシタに「いろは」という作品がある。宇宙を構成する根元要素と音の響き（波動）との関連性を探ったものだ。山岡が会場を「いろは」で囲んだことで、そうした聖的な空間を創出させることも意図したかどうか、後で尋ねてみたいところだ。（評論・アライ＝ヒロユキ）